逆井の歌人

館山一子の歌

暗い心で居なければならないと思うその事が堪へ
られない丈けだ血を吐いて寝る事なんか何でもない

短歌とは五七五七七だが、右の言葉も短歌だといわれると戸惑う。土村逆井に明治二十九年に生まれた館山一子の処女歌集「プロレタリア意識の下に」（昭和四年）のなかの一首。プロレタリア運動の盛んな時代の象徴的な歌集である。このあと一子は口語詩は迫力がないとし、定型短歌に戻っている。前後に結婚、離婚があったが、歌人としての活動が続けられている。

国境をはるかに越えて迫りくる
波あり春の岸辺を洗ふ　歌碑・観音寺

山村の小ささきわら家にこもりゐて：

土小の「ふるさと資料館」にある館山一子と短歌の添削

昭和十五年には、五島美代子、斉藤史、佐藤佐太郎、館山らの歌集「新風十人」が出て、当時の歌壇に一大旋風を巻き起こした。

幾片の白骨と化して戻り来し骨甕
を人ら捧げ来たるも

ばんざいの声に送られて征きし人
帰りかへらず夏たけにけり

戦時下にきわどいことを歌っている。昭和十六年に第二歌集「彩」、二十六年に第三歌集「李花」を出し、戦後の歌を集めている。門弟が五十一年に建立した歌碑の歌は、この中の一首。一子自身が、「敗戦後どっと押し寄せてきた米・ソ等の海外思想に材をとる」と言っている。春の岸辺は、新生日本への期待をこめたのだろう。

山村の小ささきわら家にこもりゐて
背のびするわれか時の流れに

この間、郷里に戻り、二十二年に短歌結社「郷土」を創刊、充実した活動を始めている。三十四年に逆井小の校歌を作っている。

四十二年死去、七十一歳、寂光院一乗妙詠大姉。観音寺に眠る。

末広クラブ逆井漫歩86　平成17年11月